

- 神 楽 名 おまえ
尾前神楽
- 伝 承 地 尾前地区
椎葉村大字不土野尾前
- 指 定 等 国指定重要無形民俗文化財
- 伝承団体 尾前神楽保存会
代表 尾前秀久



鎮地

□神楽の概要・由来・その他

尾前地区は椎葉村の北端、耳川の最上流に位置する集落で、耳川の源流となる尾前川は清流の渓谷として釣り人によく知られている。豊かな森林文化を有する狩猟が盛んな地区で、伝統的な狩猟儀礼が継承されている。

尾前神楽は、五穀豊穡、無病息災、山の安全などを祈願し、尾前神社の冬祭りとして奉納される。はじめに、山腹の尾前神社本殿で「式三番」と称される「一神楽」「大神神楽」「扇の手」などが舞われ、「神迎への祭典」が執り行われる。その後、隊列を組み太鼓を打ちながら山を下り、舞殿である神社拝殿に向かう。神前に榊木や御幣などが納められ、「しゅしゃ殿」と呼ばれる座奉行の進行により、神々を迎えての神楽が翌朝まで奉納される。舞殿での「式三番」の終了後には、「神楽せり歌」が客座から飛び交い、舞を盛り上げる。八調子の楽にあわせ、足は上下に動きをつけ、手を大きく広げ回転させながら、優雅に激しく舞うのが特徴である。

近隣の向山日当、向山日添、尾手納地区との神楽の交流が盛んで、それぞれの夜神楽で一演目を奉納し合っている。

□芸能の機会・場所

- 尾前夜神楽： 12月の第2土・日曜、尾前神社本殿・拝殿にて
- 春祭り： 4月15日に近い土・日曜日、「大神」「一神楽」「扇の手」を奉納。

□演目一覧

いたおこ 板起し	あんながことば 安永 詞	みこうやことば 御神屋 詞	おだりやめ 御垂止	かみしょうぜ 神招座
いちかぐら 一神楽	だいじん 大神神楽	花ノ手	扇ノ手	へい 弊ノ手
しめ 占ホメ	もりのかみ 森ノ上	もりのしも 森ノ下	じわり かみ 地割ノ上	じわり しも 地割ノ下
じがた 地固め	しょうごんどの 生魂殿	ちんち 鎮地	たちから 手力	カンシン
いわくぐ 岩潜り	オキエ・ゴツ天皇	稲荷	芝引き	にちげつ 日月の舞
火の神神楽	たいへいらく 泰平楽	神送り		

*平成27年12月に奉納された演目に基づく

□演目の特徴

「^{いたおこ}板起し」は神楽始めの神事で、御幣切りに使用するまな板の由来を説く、椎葉村の特徴的な演目である。猪肉をのせたまな板を御神屋中央に置き、その前で「シシマツリの唱文」が獵師により唱えられる。続いて御神屋に座した舞い手全員で「板起しの^{しょうぎょう}唱教」を唱える。猪肉は切り分けられ、串にさして松明の火で炙り、参拝客にも配られる。

「芝引き」は夜明けの演目で、最初に荒神面が四方に舞い、次に戸取面が登場し女面の天照大神を^{めんぼう}面棒で引き出す。再び荒神面が表れ、天照大神と手を取り合って舞う。尾前地区特有の舞で、荒神面は爺面、戸取面は若面と呼ばれる。

「火の神神楽」では、ふしの木で作った男女二体の人形を持った舞い手が、台所から舞出す。竈が使用されていた当時は、台所で「火の神祭り」が行われていた。釜の煤をつけた大根で顔にへぐろ（煤）をつけ合うと、無病息災に過ごせると云われる。

□その他の特徴

- 面： しめほめ、手力、芝引き、戸取、^{めしろう}女性面、等
- 楽： 太鼓
- 装束： ^{しらほり}白張、^{かりぎぬ}狩衣、袴、^{えぼし}烏帽子、日笠（シュロ製）、毛笠 等
- 採り物： 御幣、面棒、扇、鈴、刀、弓、矢、三方の盆、火の神人形 等
- 文書： 神楽の唱教等が書き写された「尾前神社祭典式（昭和46年）」、火の神祭りの唱教が記された「甲神祓止火乃神氏入」等が保管されている。

□伝承の現状・課題

「^{かぐらこ}神楽子」と呼ばれる舞い手は22名で、小学生の頃から神楽を習っている若い世代が多い。集落の小中学生は、男女共に全員が放課後に集会場で神楽を習う。学校では子供たちが先生に神楽を教え、先生達も夜神楽に参加する。舞も楽も子供達だけで行う「子供神楽」が盛んである。



森の下



手力



芝引き